

子ども食堂

全国初！地域内の全小学校区での子ども食堂開催を実現

解決したい課題

熊谷市の子どもの居場所の不足と、子どもの4つ貧困問題（経済的、機会、関係性、自己肯定感の貧困）の解決と、そこから発展する地域愛の醸成

課題解決のための熊谷市への4つの提案

- 提案①熊谷市版子ども食堂フォーラムの開催
- 提案②全小学校区での同時子ども食堂の開催
- 提案③資金源としてのふるさと納税型クラウドファンディング導入
- 提案④地域愛の醸成のためのウェルビーイング指標の導入



理由① 7人に1人の子どもが貧困状態

- ①お金がない（経済的貧困）
- ②チャンスがない（機会の貧困）
- ③つながりがない（関係性の貧困）
- ④自信を持ってない（自己肯定感の貧困）



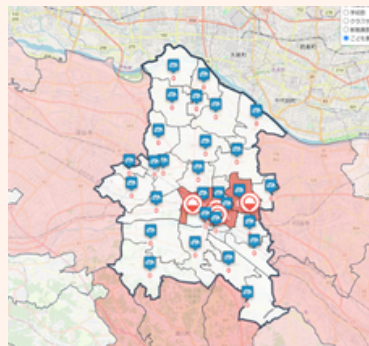
子どもの貧困率13.5% 7人に1人、改善せず（2020年7月17日 日経新聞）

理由③熊谷市民の地域愛を何で計測するか？指標がない

「熊谷には、何も無い」と多くの熊谷市民が言う。しかし、熊谷市はRESASによる『地域経済循環マップ』でも市内経済の循環が顕著に出ている。また、無い市民活動はないといわれるほど、実は多種多様な市民活動が存在する。各種レポートからも、シビックプライドと幸福度の相関性は高いことが報告されているが、働く事と暮らすことが隣会い、「何も無い典型的な地方都市でありの風景」のようにずっと思われてきた熊谷が、時代とともに豊さの定義も変化し、ついに熊谷にその理想的なバランスがあると、市民が気づきさえすれば、その街に暮らす喜びは増すに違いない。地域愛を育むことによって、幸せ度は増す。熊谷市の多様性を数字として映し出すには、国が提唱するウェルビーイング指標が不可欠だ。また、今回提案のこどもの居場所が増え、理由①の4つの貧困が少しでも解消すれば、地域愛は醸成されるはずだ。子どもへの投資が、その土地の未来をつくる。ウェルビーイング指標を用い、データによる継続的な計測を行いたい。

理由②子ども食堂運営者へのインタビューと自校給食の担い手のショッキングな発言

熊谷市の妻沼エリアは、自校給食により、作り手と子供たちがコミュニケーションを取れる環境にあるが、その担い手より、「給食がない夏休み明けに、げっそり痩せてくる児童がいる。その理由は、貧困により家に食べるものがないからだ。」とショッキングな発言があった。



出典：「こども食堂マップ」

実現にいたる時間軸を含むプロセス

- 2022年
 - 12月 官民学連携 ウェルビーイング研究会（熊谷）設立（済）
- 2023年
 - 2月 ウェルビーイングカフェ@八木橋百貨店 オープン（決定済）
 - 3月 熊谷市子ども食堂ネット-ワークキックオフミーティング（主要関係者のみ）
=別提案のスクラムワークの活用
 - 4月 日本ウェルビーイング推進協議会とのキックオフミーティング
 - 6月 立教大学RSL科目『SOCIAL & PUBLIC』開講=リソースが補充される
 - 7月 熊谷市子ども食堂フォーラムの開催
- 2024年
 - 2月 熊谷市全小学校区子ども食堂の開催
 - 4月 ふるさと納税型クラウドファンディングの導入による資金調達
→継続的な全小学校区子ども食堂の開催